



## 第36期第8回京都市社会教育委員会議の模様をマナビがレポート！

令和7年6月27日（金）、京都市総合教育センターにおいて、第36期京都市社会教育委員会議の第8回目となる会議が開催されました。今回は「第36期の審議内容を振り返って、第37期に向けての提言」というテーマで議論が行われました。

### ■ 出席委員（17名のうち14名） ※五十音順

稲垣 恭子 委員、大脇 晋太郎 委員、小林 五月 委員、佐竹 美都子 委員、  
園部 晋吾 委員、豊田 まゆみ 委員、永田 紅 委員、七海 薫子 委員、原 敏之 委員、  
本郷 真紹 委員、柗木 良子 委員、松田 規久子 委員、森 清顕 委員、森口 真希 委員

#### 開 会

1 議 事 「第36期の審議内容を振り返って、第37期に向けての提言」

#### 2 報 告

(1) 京(みやこ)まナビミーティングについて

(2) 京都市社会教育委員会議読書専門部会について

#### 3 主催事業 及び 刊行物の案内

#### 閉 会

### ■ 議事 「第36期の審議内容を振り返って、第37期に向けての提言」

○ 森 清顕 委員（北法相宗宗務長、清水寺執事、上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）



社会教育委員として関わらせていただいた5期10年の間に、社会の情勢が大きく変わったと改めて実感しています。

市内を学区単位で見ると、地域ごとの事情が異なり、京都市全体を一括りにして考えることが難しい。例えば、東山区は子どもが減り高齢者が多い。また、空き家が増えて購入する人はいても住む人がいない。こうした地域ごとの特性を踏まえた議論をしないと、現実に即したものにならないと懸念しています。

2019年頃からデジタルやAIが急速に普及する一方で、いわゆる「情報弱者」が生まれています。電気やガスなどのインフラは目に見えて実感できますが、インターネットは自らアクセスしないと情報が得られません。そして、インターネットを使うにはスマートフォンやパソコンといった媒体が必要ですが、それを使わないことを選択される人もいて、これは目の前までガスがきているのに使わないのと同じ状況です。学習の機会やプログラムが充実しても、それに触れられないと格差が広がります。情報格差への配慮は今後ますます重要であり、こうした課題を次期でも引き継いで議論いただきたいと思います。

○ 柗木 良子 委員（同志社大学 国際教養教育院 嘱託講師）

この2年を振り返り、特に印象に残っているのが生き方探究館を見学させていただいたことです。以前にも伺ったことがありましたが、少しリニューアルされていて、改めて魅力を感じました。



京都といえば文化都市と言われるように、伝統文化や芸能のイメージが強いですが、生き方探究館では、京セラ、堀場製作所、任天堂などの世界に誇る大企業が京都で創立されたことを子どもたちが知ることができる。これは本当に素晴らしいことだと思います。私のクラスの留学生からも、任天堂のゲームがきっかけで日本に興味を持ち、留学したという話をよく聞きます。京都に本社があって、そこから発信しているということはとても誇らしい。京都は和装や工芸品を作る伝統文化に加え、最先端のものづくりも盛んで、それを柔軟に受け入れ発信する教育環境や土地柄がありますので、その強みを一層活かしていただきたいです。

また、京都は大学のまちでもあり、学生が多く集まりますので、卒業後も京都に住みたい、働きたいと思うような仕組みができれば、若い人が根付いてまち全体が活気づくと思います。

情報量が多い現代では、高齢者に限らず若い人でも情報を取りに行かないと見逃してしまいます。得意不得意もあるし、偏った情報に触れる危険性もあります。だからこそ、多様な人が交流し学び合える場が必要です。そういった場がたくさんある、やさしいまちになればいいなと思います。

#### ○ 原 敏之 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

私はサラリーマンですが、現役でいる限り、継続して学び続けることが必要だと思っています。情報社会では、これまでの当たり前が通用しないことも多く、例えば原稿やあいさつ文を作成するのも、AI を使うことができます。それが良いか悪いかは別にして、これが現実だということを受け止めないとはいけません。また、情報量が多すぎて、フェイクもある中で、自分で正しいかどうかを判断する力を身に付けることが求められています。そのため、教育は小中学校・高校だけではなく、大学や社会に出てからも必要です。



私たちの時代は、就職すれば生涯そこに勤めることが普通でしたが、今は就職してもすぐに転職を考える人が多い。そういう現実を踏まえると、その時々合った教育のあり方を見直す必要があると強く感じています。

#### ○ 七海 薫子 委員（市民公募委員）



ここではいろいろなことを学ばせていただきました。青少年科学センターでは資金繰りが厳しい中でどうやって存続させるかという課題に向き合っておられることを知れましたし、リカレント教育の議題では、先が見えない情報社会の中で、どう対応していくかを常にアップデートしていく必要があることを改めて考えました。

生き方探究館では、京都を代表する企業が子どもたちに働き方や生き方を考えてもらう体験型の学習プログラムを展開されていて、実際の業務が細やかに再現されており、とても感動しました。どの企業も、これからの時代に何が必要で、何が時代にそぐわないかということを研究された成果が詰まっていました。

社会教育委員会議は現状に留まらず、常に前進する役割を持つと思います。その中で私自身が常に注意していたことは、人の話に耳を傾け、知らないことにも無関心にならず、感動や共感を忘れない姿勢です。これは日々の生活にもつながっています。教育においては人に優劣はなく平等なものです。技術

が進歩しても、最後に残るのは気遣いや思いやりの心です。今後も、先輩方をはじめ多くの方の声に丁寧に耳を傾け、心を込めて答えていきたいです。

○ 豊田 まゆみ 委員（一般社団法人京都市地域女性連合会理事）

今期の施設見学は、非常に有意義な時間でした。特に生き方探究館では、各企業の方々の協力によって子どもたちが非常にリアルな職業体験をできる場が提供されているのを初めて見ることができ、新鮮に感じました。

最近、自治会やPTAの加入率が低下しており、保護者の意識が地域とのつながりを軽視するような傾向にあるため、子どもにも影響が及び、人間関係の希薄化が進むのではないかと危惧していましたが、七海委員と大脇委員の発表を通じて、地域の人間関係が希薄になっている中でも、地域に根差した貴重な活動が行われていることを知ることができました。

新聞記事で、地域のお地蔵さんの世話をする「お当番」が紹介されていました。昔は、地域の暮らしが私的なものだけでなく、みんなで支え合う公共的なものでした。しかし、状況が変わり、そうした地域のつながりや、みんなでやる意識が少しずつ薄れてきています。京都に伝わる「門掃き」も他府県出身の私には新鮮でした。自分の家の前だけではなくお隣の前もちょっと掃く、そういったまちをきれいにする思い、生活に根差した京都特有の文化や地域活動の歴史を、私たち女性会の活動でも子どもたちにも伝え、残していきたいと思います。

デジタル化が進む中で、活字文化の重要性についても考えさせられました。読書専門部会で、東京大学の先生のお話を伺いましたが、電子書籍はものを調べるときにタッチするだけでいい便利さがある一方、ページを戻って読み直すことが難しいという課題もあります。ページをめくりながら探すのは貴重な体験で、学ぶ上で大事なことです。こうした体験を子どもたちにも味わってほしいし、学校運営協議会などの場でも、活字文化の大切さを伝えていく必要があると強く思います。



○ 大脇 晋太郎 委員（市民公募委員）



社会教育委員になってから、京都市教育委員会という肩書の影響力を実感する場面が多くありました。特に、子ども食堂で活動していると、学生が私を訪ねて来るが増えましたし、私の名前を聞き、それなら参加すると言ってくれる教員志望の学生もいました。この2年間でそうした学生が70人ほど来てくれて、教員のなり手が減っていると言われる中で、実際には多くの若者が教育現場に関心を持ち、行動していることを実感しました。学生たちに採用状況を聞いてみると、条件の良い企業を除けば、ほぼ全員が教員の道を選んでいました。

私自身の感情を抜きにしても、京都市教育委員会という肩書きがあるだけで、今まで関わりのなかった場所でも自発的に人が動くことを実感しました。社会教育委員会議が発足して半世紀以上が経ち、市民公募の制度もある中で、「何をしたいかわからない」と思いながら参加した人が、持ち帰った情報によって地域に変化をもたらすこともあるのだと感じました。

来期に向けては、専門性や知識を活かして課題を持ち寄り発表する従来型の委員の役割もちろん重要ですが、市民公募で参加された方々が、素直な感情を出して意見を交わすというやり方も非常に有意義だと思います。

○ 松田 規久子 委員（京都新聞社文化部編集委員兼論説委員）

この2年間で自分の意識が大きく変化したことを実感しています。少子高齢化が進む中で、「生涯学習」や「生涯教育」とは何かを改めて考えるとき、以前は、「余暇の活動」というイメージを持っていましたが、リカレント教育などの話題に触れるうちにそれは単なる余暇ではなく、「死ぬまでの生きがい」だと強く感じるようになりました。

年代によって学びのアプローチの仕方は様々ですが、後期高齢者になっても動けなくなっても、「学び続けたい」という意識は最期まで残るものです。講演会や図書館に行けなくても、自宅のできる学びや、老人福祉センターの書道教室など、身近な場での学びが生涯学習の本質なのだと思います。

現代は多種多様な選択肢がある時代です。京都は観光都市なので、観光客向けの文化体験や講座も数多く存在します。その中で、市民のために、子どもたちのために、子育て中の親のために、どんな講座を提供するのかを考え続けることが大切だと思います。



○ 小林 五月 委員（京都市小学校長会理事・京都市立広沢小学校長）



私は小学校で校長を務めていますが、小学校は学びの基盤を築く場所であり、非常に重要な役割を担っていると思っています。子どもたちと一緒に生き方探究館の活動に参加していますが、そこでの京都の企業の様子や、企業の一員として模擬的な活動を行う取組は私にとってはなじみのある光景でしたが、社会教育委員の皆様には新鮮だったと伺い、生き方探究館での取組の大切さを再確認しました。

情報教育は、学校でもこの5年で大きく進展しました。子どもたちはパソコンを上手に使いこなし、時には大人以上のスキルを見せることもあります。その反面、正しい知識を持たないとトラブルに巻き込まれる可能性もあるため、小学校でも情報リテラシーや情報モラルについてしっかり教えていく必要があると感じています。

今はネットで調べれば知識や情報はすぐ手に入ります。だからこそ、得た情報をもとに、自分がどう考え、どうつなげていくかが重要です。「学びたい」「できるようにになりたい」と思える意欲や意識を小学校で育てることが、とても大切だと感じました。学びは学校で終わるものではなく、生涯続くものであり、子どもたちには学びを生きがいとして持てる大人になってほしいと思います。

○ 永田 紅 委員（歌人・京都大学大学院農学部研究科研究員）

社会教育は学校教育のようにテストで成果を測ることができず、結果が見えにくい、評価しづらい面がありますが、最終的には本人が「うれしい」「知識を得てよかった」と感じるのだと思います。松田委員がおっしゃったように、それは「生きがい」にもつながると思います。

歴史を学ぶことで、例えばこの場所が源氏物語の舞台だったことを実感することができる。そうした豊かさこそが、社会教育の原点ではないかと思います。講座やセミナーを企画して人を集めることは比較的容易ですが、そこで得た知識や感動をどう他者に還元していくか、その後の展開が難しい。学んだことを「面白かった」で終わりにせず、参加者がその知識を共有し、再び集まる場を作ることも、社会教育の重要な役割だと思います。

また、ジェンダー教育もこれからの社会において重要なテーマだと感じています。学校での学びは始まっているようですが、社会全体ではまだ取組が難しい面もあり、今後の議題として検討されるべきだと思います。



そして、関心のない人にどう関心を持ってもらうかという課題については、クラウドファンディングや寄付文化の活用が一つの方法だと考えています。日本では寄付文化が根付きにくいと言われますが、寄付を通じて「自分が支援したことがどうなっているか」という関心を持ってもらえる仕組みはとても有意義です。お金だけでなく、関心も寄せてもらえるという点で、社会教育にも活かせるのではないのでしょうか。

最後に、(新京都戦略にある)「ぬか床のようなまち」というキャッチフレーズが私はとても好きです。もわもわと発酵しながら、いろいろなことが混ざり合っていく。これはもっと前面に打ち出しても良いのではないかと思います。

#### ○ 稲垣 恭子 委員 (京都大学理事・副学長)

ここ2~3年、学生から「コスパ(コストパフォーマンス=費用対効果)」「タイパ(タイムパフォーマンス=時間対効果)」という言葉をよく聞くようになりました。キャリア形成に関するイベントでも、コスパ・タイパで自分のキャリアを決める学生が増えている印象があります。そのような価値観の中で、社会教育や教育文化は成果がすぐに見えるわけではないので、コスパ・タイパが悪いと思われがちです。



コスパやタイパという言葉を書く度に思うのが、「効率が良かった」と感じるのは、何かを終えた後、振り返ったときではないのでしょうか。

最近、人生を振り返る話を聞くのが好きなのですが、多くの方が予期せぬタイミングや出来事で人生が変わったと言われます。そうした「セレンディピティ(予期しない偶然がもたらす幸運)」はいつ訪れるかわかりません。もやもやとした状態での出会いや出来事がきっかけとなり、人生が大きく変わる。なんとなくもやもやした感覚を抱え続けることを支えるのが文化ではないかと思っています。

今期は多くの現場を見学させていただき、子どもたちが熱心に学べる取組が行われていることを知ることができました。一見、何につながるかわからない取組も、コスパやタイパにとらわれると関心が偏ってしまいます。広い視野で関心を持ち、幅広い経験の中で思いがけない出会い=セレンディピティにつながると思います。

また、図書館や美術館、博物館などの施設で、一つの目的だけではなく横串のように横断的につながる仕組みがあるとより豊かな経験が生まれると思います。図書館で本を読みつつアートに触れたり、カフェで美味しいものに会ったりと、一つの目的の空間で思いがけない発見があるような施設です。費用はかかりますが、ハード面の空間づくりは重要です。ソフト面も、施設の担当者だけではなく、委員の皆様の多様な専門性を活かして、教育関係に留まらず、企業や大学などとも連携し、子どもたちの教育に具体的に関わる仕組みがあるといいと思います。今、大学の教員が小学生に自分の専門分野を直接提案するようなプログラムに関わっていますが、研究を身近に感じられる、領域を超えた連携を取れる仕組みがあると良いですね。

京都は、伝統文化からゲームのような現代文化が共存する豊かな文化リソースをもつ国際都市です。「伝統は現代アートにあらず」と言われることもありますが、今の子どもたちは外国の子どもたちと同じような感覚で文化を楽しんでいます。人気キャラクターの屏風絵など、つながりを新しいリソースと

してデザインをする。そういうものが文化の国際化にもつながるのではないのでしょうか。是非、委員の皆様のお知恵でそういった面白さをダイナミックに変えていける仕組みづくりをしていただきたいと思います。

○ 森口 真希 委員（株式会社堀場製作所 理事 管理本部副本部長）

最初にこの会議へ参加した頃はまだコロナ禍の名残りがありましたが、最近では以前のように人と人が直接議論ができるようになり、約4年の間の大きな変化を感じています。今期は、会議室での議論だけではなく、実際に現場に出向き、青少年科学センターやアスニー、図書館等での素晴らしい取組を目の当たりにし、文字の情報だけではない現場に足を運んでこそわかることを感じられました。



振り返りの中でとても良いと思ったのは、読書専門部会を立ち上げ、読書推進を具体的な活動に結び付けていただいたことです。子どもたちに活字に触れてほしいという皆様の想いがここにつながったことは、本当に素晴らしい。

皆様のお話にもありましたが、情報や体験の格差をどう埋めるか、そしてムーンショットというか、理想とチャレンジの狭間をどうするか。先端を走る人材の背中を押すことと、後を追う人への支援、その両方が必要です。

AIの台頭により、「私とは何か」という哲学的な視点に立ち返るのではないかというお話を、生成AIの研究をされている先生に伺う機会があり、生成AIが自我を持つかのような領域に来ている中、人間の「私」との違いをどう示すか、禅問答のような問いを、私たちも己を改めて知るためにもう一度やってもいいのではないかと考えています。知識や経験を持ち寄ることはすでに生成AIでも可能です。だからこそやってみたいのが、こうした会議で順番に発言するだけでなく、ワークショップ形式で、少人数で意見交換を行い、その結果を会議で話し合う。自分語りを通じてお互いを知ること、深い理解が生まれるのではないのでしょうか。生成AIが何でも答えてしまう社会だからこそ、人間のウェットなところを知って、もっと自然体の交流をしたいです。

私は最近2つの「サロン」に参加しているのですが、サロン文化というのは、高尚な知の交わりの場としてとても意義のあるものだと思います。明治になって多くの文化が東京に移された後に、日本画家や知識のある方々が「サロン」を立ち上げられた。アウトプットを求める場ではなく、知を交わし合い、それぞれが自分のフィールドに持ち帰って活かすというのが京都らしいと感じます。京都ブランドを体現するような、話していてひと味違うと感じられる京都人を育てるというビジョンのもと、こうした小さな集まりがもっと増えていくといいなと思っています。

我々の会社にも、海外から来て京都で働き、京都を愛してくれる社員が増えています。そういった方々との関わりを通じて、異なる視点や価値観によるインクルージョンの実践が新たな発展のきっかけになりますし、身近にこうした場があることは、京都の子どもたちにとって恵まれた環境だと思います。次期に向けて、ダイバーシティや交流の在り方について皆様と一緒に考えていきたいです。

○ 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐佐織代表取締役、アテネオリンピックセーリング競技日本代表）  
やる気の出なかった子どもたちが、スポーツを通じて、憧れや「こんな人になりたい」という気持ちを持ったことをきっかけに、自ら学び努力する姿を何度も見てきました。そうした動機は、まわりがきっかけを与えることで生まれることもあります。最終的には自ら動かないといけません。そして、自

分で学び始めた先には、チームや組織の中で人と関わりながら学ぶ段階に入ります。人との関わりの中で、偶然から生まれる発見により今まで自分にはなかった経験や価値観を得て成長していくのだと思います。

最近活用が進んでいる生成 AI を使うにも、最初の指示や最終的な判断は人間が行う必要があります。その判断力は自ら学んだことだけでは不足し、人との関わりで学んだ経験などが基になります。そのためにも学ぶ環境づくりは重要です。



一方で、人と関われる場所は減ってきていて、地域教育も仕組み化されてはいるものの、どこか人の善意に頼っている印象です。また、学んだことを活かすアウトプットの場や発表の機会、ゴールの見え方も曖昧です。自分の興味を突き進むのも良いですが、苦手なことや時間がかかることに取り組むことで得られる学びも多くあります。私自身、せっかちで効率を重視しがちですが、時間をかけた経験から多くの発見がありました。そうした「やりたくないこと」に挑戦できる場を作ること大切だと感じています。ここで多くを学ばせてもらっている今、与える・与えられるというベクトルの向きや価値観も変わっていくと思います。これからも皆様と意見を交わしながら、私自身も学び続けていきたいと思っています。

#### ○ 園部 晋吾 委員 (NPO 法人日本料理アカデミー副理事長、山ばな平八茶屋主人)



私自身が一番大切にしていることは人間関係ですが、一番苦労するのも人間関係です。この人間関係や人とのつながりが大切だというのは皆様の意見の中にもたくさんありましたが、「つながり」「コミュニティ」「人間関係」といった言葉が多く出てくるのは、それがとても希薄になってるからなのではとも思います。

デジタル社会が進展し、人間関係が希薄になり、世の中が分断されて壁ができ、隔離される人が出てきている。生成 AI が発達し、人とではなく生成 AI と会話する人もいて、こうなってくるともう人はいらぬよねと、ますます分断が進みます。もちろん生成 AI は便利ですから私も使いますが、大事なことは「道具は使うもの」だということです。道具に使われるようになってしまうと、そのうち道具に支配される世の中になるのではないかと危惧しています。例えば、生成 AI と話していると心地良く思うことがあります。これは生成 AI が、この人はこう言えば喜ぶ・怒る人ということ进行分析して蓄積し、対応しているからです。こうなるともう生成 AI に飲み込まれてしまいます。そうならないようにするためには、デジタルとは一線を引き、もう少しアナログのほうへ持って行かないといけないのではないかと思います。

お茶を中心とした茶道、お花を中心とした華道のように、文化というのは人と人との触れ合いの場です。「学び」は一人でもできますが、人とつながりながら学ぶことも大事です。大きなコミュニティでは発言しにくい人も、小さなコミュニティでは発言しやすいこともあります。人の話や意見を聞くことによって、自分の考えにプラスすることもあれば、自分の考えを刷新することもできます。それができる場がこの会議で、私もこの10年で多くを学ばせていただき、自分の考えをまとめ、見直すきっかけにもなりましたが、こういったことをいかに広げていくかが大事になっていくと思います。つながりを軸に考え、つながりながら学ぶ・学びながらつながる、ということを考える必要があります。人間関係が希薄化し分断されていく中で、それをいかにしてつなげていくかをこれからも考えていかなければいけないと思います。

○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）



地域での人とのつながりや、遊びを通じた人間関係の形成が難しくなっていると思います。スマホやパソコンで簡単につながれる時代ですが、バーチャルだけでは本質的なつながりは築けません。一方で、情報ツールの活用や情報教育の重要性も高まっており、子どもたちはその狭間で難しい選択を迫られています。だからこそ、人が直接つながることができる場である地域コミュニティを改めて見直す必要があると思います。

デジタル化にはメリットだけではなく課題もあり、例えば図書館のペーパーレス化は資源の節約という面では望ましいですが、「紙でなくていいのか」という疑問もあります。最近ではデジタル教科書の見直しも話題になっており、デジタルとアナログの使い分けについてどこで線を引くかを見極める必要があります。

先日、社会教育委員会議のもとに読書専門部会が立ち上がり、今後の京都市における読書活動の取組について議論が進められていますが、専門的な枠にとらわれず、サロンのような小規模なワークショップで、数人が気軽に意見交換できる場を設けることも有意義ではないでしょうか。そうした場で得られた気づきを全体で共有する仕組みがあれば、より柔軟で実りある議論につながると思います。

今後、社会教育委員会議として多様な意見を集め、提言につなげていきたいと思っています。

## ■ 報告－1 京(みやこ)まなびミーティングについて

5月9日に本郷議長、16日に柁木委員により、「京まなびミーティング」をアスニー特別講演会として実施しました。

## ■ 報告－2 京都市社会教育委員会議読書専門部会について

前回会議において設置が決定された「京都市社会教育委員会議読書部会」について、委員、運営要領等の報告がありました。

## ■ 主催事業 及び 刊行物の案内

## ■ 教育長 挨拶

## ■ 閉 会



※ この摘録の作成には補助的に生成 AI を利用しています。